

東京国立博物館所蔵「厨子入愛染明王像」の図像解釈と制作背景

菅野 龍磨（上原美術館）

東京国立博物館所蔵の厨子入愛染明王像(以下、本作とする)は、奈良県天理市にかつて存在した内山永久寺の旧蔵品であることが先行研究により判明する。愛染明王像と厨子を含めて、制作当初(13世紀後半)の姿を伝えていると考えられる点が特筆される。

厨子中央に本尊として納められた愛染明王像は、内山永久寺の記録である『内山之記』により「大和君雲賀」の作例と判明するなど、近年の彫刻史において改めて評価されている像である。しかし、愛染明王像と厨子との関係については十分に論じられておらず、その制作意図を理解するためには総合的な解釈が求められる。

すなわち、厨子の扉裏面には愛染曼荼羅の諸尊と、降三世明王、金剛夜叉明王が描かれ、その上部には愛染明王の根本経典となる『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』の経文が掲載される。さらに、厨子背面には焰摩天曼荼羅を、厨子上縁には八方天、厨子天蓋には仏眼仏母種子曼荼羅が表されている。発表者はこれらの曼荼羅は、愛染明王と焰摩天及び仏眼仏母との同体説に基づき構成されたものとする。

本作の同体説を理解するうえで取り上げたいのが、奈良・西大寺所蔵の「大神宮御正体厨子」(14世紀)である。この作品は納入文書により、西大寺の叡尊が蒙古襲来の際に行った、伊勢神宮参詣が制作背景にあったことが判明する。本厨子内には金剛界と胎藏界の種子曼荼羅をそれぞれ納めるが、金剛界の裏面には愛染種子曼荼羅を、胎藏界の裏面には仏眼仏母種子曼荼羅を描く。そして、愛染と仏眼仏母の種子曼荼羅の各中心には、伊勢両宮を象徴する御正体としての鏡を嵌め込む構造となっている。ここに見られる意図的に対象を隠すともいうべき表現は、本作厨子における、手の込んだ曼荼羅を制作しつつも、愛染明王像の存在で覆い隠す構造にも通ずるように思われる。

以上の分析を通して、改めて本作が内山永久寺に伝来した意義を考えた際に着目されるのが、撰関家との関わりである。内山永久寺は真言密教系の寺院であったが、興福寺大乘院の末寺であり、承久の乱に際しては近衛家実が隠棲するなど、撰関家との関わりが深い。そこから、本作厨子に表される経文の筆者として、『内山之記』に記される「高(鷹)司殿」は、時の関白であった鷹司兼平を指すものと推測される。兼平は叡尊の熱心な帰依者であり、伊勢神道を大成した度会行忠との関わりも知られる人物で、本作の制作にも関与した可能性を指摘したい。

以上のように、本作は失われた内山永久寺の旧蔵品である点、中世愛染明王信仰の具体的な様相を伝えている点、鎌倉時代後期を象徴する事象との関わりが考えられる点から、彫刻史のみならず、絵画史や工芸史、また宗教儀礼研究など多領域にまたがる論点を有する重要作例であると発表者は考える。本発表では、本尊及び厨子の総合的な図像プログラムを明らかにし、その制作背景を推定することにより、本作の歴史的意義を提案したい。